

ORT とロールシャッハ法に表れた対象関係の比較

—健常群と臨床例の観点から—

17002PCM 片山 郁野

I. 問題と目的

M.Klein は、精神分析治療の臨床実践を通して、心の発達の過程には2つの質の違う段階が存在することを発見し、理論化した (Klein, 1993; Segal, 1977 岩崎 1997)。すなわち、対象を良いものと悪い物に二分化することで自己と対象の関係を安定させる段階『妄想一分裂ポジション』と、二分化した対象が1つに統合されていく段階『抑うつポジション』の2つである。2つのポジションには、それぞれ特徴的な防衛機能が作動しており、臨床的にはこの防衛機能の作動している様相を手がかりにして、2つのポジションの達成具合を推測することが治療の焦点を定める上で重要になっている。これら、対象と自己との在り方、関係性に注目した精神分析的な臨床理論を総称して「対象関係論 Object-Relations Theory」と呼んでいる (Alvarez, 1992 千原・中川・平井訳 2002)。松木 (2002) は対象関係論が二者間の心の交流についての理解をもたらす理論であるとし、人は、今生きている現実世界とは別に、心の中に情緒的な内的世界をもっており、そこに棲む自己と対象との交流の在り方に、現実世界での考えや情緒、振る舞いなどが無意識のうちに規定されているとした。そのような対象関係を捉える試みとして、青年期における対象関係を評価する尺度 (井梅・平井・青木・馬場, 2006) や、情緒的恒常性と孤独感の側面から内的対象関係を明らかにする尺度 (松重, 2005) が作成され、投映法心理検査にあらわれる対象関係の客観的基準の作成が試みられてきた。Westen と共同研究者たち (Westen, 1991, 1993; Westen et al., 1989) の、対象関係の異なった次元を査定するための尺度は TAT に現れる対象関係を多次的に捉える SCORS (Social Cognition and Object Relations Scale) として発展した。この

ように、内的世界・内的対象関係について、多方面からの研究がなされている。

Phillipson (1973) は、対象関係の力動的な解釈を目指し、Object Relations Technique (対象関係投映法、以下 ORT と略す) を作成した。ORT は、絵画刺激と物語想起が対人関係に起因するという TAT の特性を生かしつつ、知覚の特異性の理解というロールシャッハ法の分析・解釈方法を取り入れることで、これら二つの検査を統合する目的で作成された投映法心理検査である (松瀬, 2010)。しかしながら日本での使用例はほとんどみられておらず、ORT が捉え得る対象関係や、その有用性について明らかにしている研究はほとんどない。そのため、ORT が活用されることを目指し、その理解を深めることは意義があると考えられる。

II. 研究1

1. 目的

(1) ORT の刺激特性とそれが捉える内的対象関係の性質について明らかにする。(2) ORT とロールシャッハ法 (以下、口法と略す) の結果を比較し、両検査がどのように関連するかについて、対象関係を中心に検討する。

2. 方法

A 大学に在籍する学部生および大学院生 26 名を対象とし (男性 9 名, 女性 17 名, 平均年齢 25.4 歳), 口法を施行し, 1 週間程度の間隔を空けて ORT を施行した。施行法について, 口法は名古屋大学式技法 (2018), ORT は, 関山 (2001) の SCORS-C に準拠した。

3. 結果と考察

ORT の各図版・各系列の特性を明らかにするために, SCORS-C の各尺度において一要因分散分析を行い, 主効果が認められた尺度は, 下位検定を行った。『表象の情緒特性』尺度, 『対人関係への感情投入』尺度, 『望ましさと道徳規

『感情投入』尺度、『社会的因果性の理解』尺度、『攻撃衝動の体験と処理』尺度において、図版ごとの有意な差がみられ、『表象の情緒特性』尺度と『望ましさと道徳規範への感情投入』尺度において、系列ごとの有意な差がみられた。したがって、ORT 図版は、各図版・系列で異なる検査刺激を有しており、ORT 図版に質的な差があることが明らかとなった。すなわち、図版ごとに賦活され易い、あるいはされ難い、対象関係を有していることを示しているといえ、TAT やロ法がそうであるように、ORT においても、図版のそれぞれに、多くみられる反応やテーマが存在することを示唆していた。

ORT とロ法は、体験型と各指標を用いて比較した。体験型では SCORS-C 尺度との一要因分散分析、各指標では相関を求めた。体験型では、『人間表象の複雑さ』尺度、『対象関係への感情投入』尺度、『社会的因果性の理解』尺度、『攻撃衝動の体験と処理』尺度において、両向型が外拡型よりも有意に高かった。したがって、外拡型に比べて両向型が健康的な対象関係と、現実適応能力を有していることが示唆された。また、内向型の分析において、内向型は ORT のカード刺激に対して、内的に統制された物語が反応として語られているために統計的な有意差がみられなかったと推察でき、検査対象者の対象関係の在り方や、防衛が投映されていると考えられた。

ロ法の各指標と SCORS-C 尺度には、正負ともに多くの相関がみられ、ORT によって表現された対象関係が、ロ法の各指標が示している意味づけや内容に、裏付けられる結果となった。つまり ORT によって浮かび上がる対象関係と、ロ法から捉えられる人格構造に一致する点が多くみられ、ORT の信頼性が得られる結果となった。

II. 研究 2

1. 目的

臨床群の 3 事例を個別に検討し、ORT とロ法、両検査の結果に表れた対象関係を明らかにする。

2. 方法

A 病院に入院している「統合失調症」と「気

分障害」と診断された患者のうち、各主治医からロールシャッハ法が施行できると判断された 3 名を対象とした。施行法は研究 1 と同様の手続きをとった。

3. 結果と考察

臨床群の 3 事例において、ORT とロ法の結果から示される対象関係を検討したところ、ORT では、ロ法で示された研究協力者のパーソナリティ特性や感情構造、防衛機制などが、より具体性を帯びた形で物語として描写されていた。また、ORT で語られる物語は、事例ごとに異なる特徴や傾向を有しており、その特徴は研究協力者の内的対象関係に基づいて説明可能なものであった。3 事例に通ずる特徴としては、研究対象者の生活歴と関連する対象関係が物語に多く反映されていたことがあげられる。これは臨床群特有の自我境界の弱さや、自他未分化な対象関係によって、他者に対する安定したイメージの薄さから生じているものであると考察した。加えて ORT の物語構成において、各研究協力者の、病理として表れている内的対象関係をも捉え得ることが示唆された。したがって、ORT の反応内容を個別に検討すること、ORT を臨床場面で用いることの有用性が示されたといえる。

III. 総合考察

研究 1 では、ORT における標準的な反応の把握の一助となる知見が得られた。研究 2 では、ORT の内容分析が、研究協力者の内的対象関係をロ法の結果とあわせて、検討することでより詳細に捉え得ることを明らかにし、ORT の臨床的価値が示唆された。これは ORT の図版特性である、反応への高い自由度によって、様々な対人場面の可能性が拓かれ、個人の内的対象関係が十分に展開された結果だと考えられる。研究協力者特有の認知、対象へ働きかける際の態度と対処や防衛の仕方、自他イメージ、現実場面での社会的スキル、対人関係の特徴など、ORT が明らかにする対象関係はさまざまな視点と幅をもったものであった。つまり、ORT がさまざまな側面・水準の対象関係をとらえる検査と成り得、今後の発展が期待できる検査であることが示唆された。